
笑い三年、泣き八年、太鼓たたいて十三年

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑い三年、泣き八年、太鼓たたいて十三年

【Nコード】

N2763M

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

吉原で太鼓持ちをつとめる平助は、ある晩、箱屋の成田屋七兵衛のお座敷へ呼ばれることになる。そこは遊女静波の部屋でもあった。やがて彼は、静波と成田屋のあいだに深い因縁があることを知る…。職業小説企画参加作品です。

笑い三年、泣き八年（前書き）

二ヶ月以上の長きに渡って開催して参りました職業小説企画も、そろそろお開きのようです。参加作品のとりは、マネージャーであります、私りきてつくすが務めさせていただきます。

さてさて、今回の企画へ投入する作品、じつは企画発案者であります近藤義一さんより「ひとつ時代小説でやってくれ」というリクエストをいただいております。なので久々に挑戦してみたいんです、時代物。いやあ、やっぱり難しい。テーマは江戸時代を中心に遊郭で活躍した男芸者、太鼓持ち。正式名称は幫間と言うらしいです。彼らの仕事を通して見た世間の悲哀と、浮き世の情けを上手く表現できておりましたなら拍手ご喝采を、だめだめならもう読み飛ばしちゃって下さい。ちなみに、この前書きをしたためている時点では、小説はまったく完成しておりません。さてさて、どうなることやら……。

笑い三年、泣き八年

「おうい、こら平助やい」

暮六つの鐘が鳴り止んでまもなくのこと。

幫間の溜まりとなつてゐる二階屋の六畳敷に丸くなつていた平助は、聞き慣れた伊左衛門のどら声に心地よい熟寝から引きもどされた。眠い目をこすりながら、ふわつと生あくびを噛み殺す。

「やれやれ……、まいどまいど、あの塩っ辛い声でたたき起されたんじゃあ、かなわないねえ。寿命が縮んじゃいますよ、ほんと。たまにあ色っぱい姐さんの声で目を覚ましてえもんだ。ぬしさん、おつとめの時間ですわえ、どうぞ起きてくりやしやんせ……、とかなんとか耳元で囁かれてね」

ぶつくさ言いながら、ささくれ立つた古畳の上でのろのろ半身を起こしていると、ふたたび階下から伊左衛門のがらがら声が飛んできた。

「ぼやぼやしてねえで、さつさとお座敷へ上がってんだ、このとうへんぼく。おめえのへそ踊りがご所望なんだとよ。いいか、ここはひとつ上手く踊ってみせて、たっぷりご祝儀はずんでもらうんだ。おいこら聞いてんのか、このすつとこどっこい野郎が」

「はいはい、聞いておりやすよ。丁稚を使つんじゃあるめえし、そんなに、ぼんぼん言うもんじゃござんせん……」

役者のように整つた顔をつるりとなで、無精髭がのびていないか確かめてから、平助はゆっくりと立ち上がった。まるで日暮里の布袋さまみたいに、でんと腹が突き出している。歳は、壮年といったところだが、いまだ風貌に幼さが残り、それが何とも言えない人懐っこい雰囲気をつくり出している。彼は、着物の襟をしゅつとしごいてから、その形の良い太鼓腹をぽんと叩いてみせた。

「あつしのへそ踊りがご所望たあ、そいつはまた、ありがた山のとんびからす、ときたもんだ。まあ、太鼓持ちも、お女郎さんも、腹

で稼ぐことにあ変わりござんせんね。はっはっは。もつとも、お女郎なんてえのは、腹は腹でも、あつしらとは使う部分がまったく異なるんでしょうけれど……」

磨き込まれて黒光りする階段の上を、扁平足をぺたぺた鳴らしながら下ってゆくと、階段下の暗がりから伊左衛門がよきつと首だけのぞかせた。僧形につるりと剃りあげているが、長年のやくざ稼業が染み込んだものか、それとも生まれつきか、凄みのあるなんとも近寄りがたい顔をしている。その幫間の元締めが、眉をひそめて怪訝な表情を見せた。

「……なんでもお大尽さまは、成田屋七兵衛の旦那ってえ話だ」

「え、成田屋さんて、日本橋堀留の？ あの御用箱師の？ へえ、

今日は献残屋のふるまい酒でもあつたんですかね」

「いんや、成田屋さんお一人で来なすつたようだ」

「そりや珍しい」

平助は、おおげさに驚いてみせてから、商売道具である一枚皮の団扇太鼓を、ででん、と打った。

「あの儉約家の成田屋さんがねえ……、とうとう通の道にお迷いなすつたか。歳々年々人同じからず、年を取ってから覚える道楽てえのは、身を滅ぼすつ、なんて言いますけどね」

とたんに、伊左衛門のごつい拳が飛んできて、ばかりと彼のおつむを打った。

「痛てっ」

「よけいなこと言つてんじゃねえ。そんな無駄口叩いてるひまがあつたら、さつさと仕事へ行つておあしを稼いできやがれてんだ、このとうへんぼくめ」

ぴしゃりと決めつけられ、平助は着物のたもとで顔を覆い、肉付きのよい猪首をすくめて、うへえと唸った。

眠らない街、吉原。

昼夜の別なく営業することを幕府から公認され、遊女三千人を抱

えるというこの大遊郭は、明暦におきた振袖火事のおり、日本橋から伝法院の北、のどかな田園風景のひろがる浅草日本堤へと移転した。

それが新吉原である。

切り絵図などを見てもわかるように、田んぼのなかに地勢に逆らったかたちで四角い敷地が、まるで陸の孤島のようにぼつんと存在している。お歯黒ドブと呼ばれる淀んだ堀と、忍び返しをつけた厳重な黒板塀で囲まれた、ある種牢獄のようなものしい空間だ。庶民が暮らす日常とはあきらかに趣を異にする、なんとも胡散臭い場所である。入り口は、黒塗りの大門が、ただ一カ所だけ。この大門口から内は、遊女として売られてきた女たちにとっては苦界、遊蕩に來た男たちにとっては、まさに極楽世界というわけである……。

幫間の溜まりを飛び出した平助は、ひやかしの酔客たちがそぞろ歩く中通りを、人をかき分けかき分け足早に進んだ。待合い辻を突っ切って、茶屋の裏手にまわり込む。すると、一件の傾城屋が見えてきた。紺股引に、妓楼の印の入ったはつぴを着た「ぎう」と呼ばれる下男が、玄関先でほうきを使っていた。平助は、例の人懐っこい笑顔を向けて、その下男に声をかけた。

「ちよいと、ごめんなさいよ。今夜ここでお座敷を張っている成田屋の大旦那さまに呼ばれて來ただけど、お里さんは中にいるのかい？」

「いるよ」

とぶつきらぼうに答えてから、店の用心棒もかねるその大柄な下男は、蔑むような視線を向け平助を見下ろした。そして忌々しげに、ちつと舌打ちする。

「あんたら男芸者はいいいな。客と一緒に酒飲んで騒いでりゃあ、それでおまんまが食えるんだ。姐さんがたみてえに体売るわけじゃなし、俺たちみてえに朝から晩まで雑用と力仕事に追われるわけじゃなし……、そんなに楽しんで生きてたら、そのうち罰が当たって、ころっとおっ死ぬかもな」

すると平助は、こういうとき見せる泣き笑いの表情になって、右手を左右に振つてみせた。

「バカあ言っちゃあいけませんよ。あつしら太鼓持ちつてえのはね、姐さんがたみてえに色気でもつてお客に媚びることができないぶん、身につけた芸と喋りだけで座を保たせなきゃならない、見た目よりも、ずっと辛い稼業なんだ。ただだけのおあしだつて、あんた、ようようスズメの涙ほどだつてえのに」

勢いよく太鼓をででん、と鳴らす。

「死ぬほどに、つとめて太鼓一分とり……、つてね」

下男は、納得いかないといったふうに、ふんとそっぽを向いた。そこに暖簾を手でかき分け、お里が色っぽい顔をのぞかせる。

「あら、平助さん。お待ちしてましたよ」

年増だが、切れ長の目元が涼しげで、華やかな芸妓とはまた別の、浮き世離れた魅力を感じさせる女だ。彼女たちは「花車」と呼ばれる吉原の遣り手で、客と遊女のあいだを取り持つて、いろいろな世話を焼くことを仕事としている。こういう遣り手のほとんどが、もとはこの吉原の遊女で、そのため花車には歳のわりに姘っぽい女が多かった。

「こりやどうも、姐さん。こんち、あつしのへソ踊りがご所望という、物好きのお大尽さまに呼ばれて、こうしてまかり越しやした。

へへへ」

そう言つて、例の皮張り太鼓をでんと鳴らそうとすると、その手を押しとどめて、お里が声をひそめた。

「お座敷へ上がったもらう前に、ちよいと耳に入れといてほしいことがあるんだけどね……」

「へ？」

人目をはばかるように素早く辺りをうかがつてから、彼女は小袖のたもとで覆った口を、平助の耳元へと寄せた。

「成田屋さんがご逗留されるのは、静波のお座敷なんだけどね……。平助さん、あんた静波が、元はさる大店の娘だつたつて話、聞いた

「ことあるかい？」

「いえ、初耳です」

平助は、小さくかぶりを振った。お里が、ふうとため息をつく。

「あの娘の生家はね、下野屋といって、もとは仙台藩御用達の献上物箱問屋だったのさ」

箱屋……。

平助の頭のなかで、なにか閃くものがあつた。

「じゃあ、あれですかい。ひよつとして、成田屋さんとなにか因縁でも……？」

「察がいいね。むかし仙台の殿様が参勤交代で江戸へ出てきたおり、將軍様ご献上の品を入れるための箱を用意するよう仰せつかったのが、静波の実家である下野屋だったのさ。箱だったて、一つや二つじゃあないよ、なにせ將軍様への土産物すべてを収める箱だからね。急いで相当な数の箱を集めなきゃならなかった。ところがだよ……」

遊女たちの嬌声がもれ聞こえる楼のなかを、彼女の切れ長の目がちらりと見やった。

「ちょうど同じころ、浚明院さまが、天朝さまより右大臣の位を授かってねえ……。それで、その返礼のお品をおさめる箱が大至急必要だつてんで、その納入を、幕府御用達箱問屋の成田屋さんが命じられたのさ」

「へえ……、世の中にあ、ずいぶんと間の悪いこともあつたもんですねえ」

平助の胸のなかを暗い予感がよぎる。お里がうつむいて、妙にしんみりした口調でつぶやいた。

「そんなことがなければ、あの娘だつて……、ここへ来ることもなく、今ごろは大店の娘として幸せに暮らしていただろうに」

「じゃあ、けつきよくのところ下野屋さんは御用をしくじったわけ？」

「ああ、成田屋さんのほうが商売は古いからね。あつという間に江

戸じゅうの箱を買い占めちまったのさ」

だんだん話が読めてきた。つまり、成田屋と箱の争奪戦を繰り広げて敗れた下野屋は、仙台藩の御用を解かれたうえ、厳しい叱責をうけ、あつという間に没落してしまったのだ。そして廃業、離散した家族のなかに、当時、十歳かそこらだった静波がいた……。

「成田屋さんと静波は、互いのそうした因縁をご存知なんでしょうかね？」

恐る恐る平助が訊ねると、お里は、おきゃんな仕草で彼の鼻先へつついと指を突きつけた。

「そこさ、あたしが心配してるのは。静波って娘は、あれで気の強いところがあるからね。そんな親の敵みたいな男を、そうと知っていて自分の座敷へ上げるずないんだ。けれどだよ、まさかとは思っただけどね……」

お里が言いよどむその先を、平助が続けた。

「あえて自分の座敷へ上げておいて、酒を飲ませ、成田屋さんがすっかり酔って油断したところを……ですかい？」

平助の目をまっすぐに見つめ返して、お里が言った。

「だから、そうならないように、あんたを呼んだのさ。二人を監視させるためにね」

「へ？ あつしをご指名くださったのは、成田屋さんじゃなく、お里さんだったんですかい？」

「あたしがね、ぜひにと言って成田屋さんへおすすめたのさ。いい太鼓持ちがいるってね」

「じゃ、じゃあ……、あつしのへソ踊りは？」

まゆ根をよせて情けない表情を見せる平助の背中を、お里が勢いよくぽんと叩いた。

「踊りたきや勝手に踊るがいいさ。だけどいいかい、よくお聞き。成田屋さんと静波の二人が、お互いにまつわる因果因縁を知らなければ、それでいい。あんたは、話題がそのことにふれないよう、気を回してくれさえすればいいんだ」

「へ、へえ……」

「だけでもし、二人のあいだに、なにか不穏な空気を少しでも感じ取ったら」

「……感じ取ったら？」

平助が、ごくりを固唾をのみこむ。お里が、ぐっと目に力をこめて顔を寄せた。

「あんたには、全力でその雰囲気をぶち壊してほしい」

「ぶ、ぶち壊すたって、いったいどうやって？」

「なに情けないこと言ってんだい、あんた太鼓持ちだろう？ お座敷でにぎやかな空気をこしらえるのが仕事なんだろう？ だったら簡単なはなしじゃないか。静波が過去の因縁にとらわれ間違いなどおこさないよう、ぱーっと騒いで楽しい雰囲気をつくりあげるんだ。恨みつらみだけじゃ人は生きてゆけない、ときには過去を忘れ去ることだって大切なんだよ。いいかい、すべてはあんたの双肩にかかっているんだからね、しっかりおやり」

こりやなんだか、大変なことになってきやがった。

暮れなずむ夏の空に、ぺん、ぺんと、三味の音色が吸い込まれてゆく。平助はひとつため息をついて、楼の屋根越しにまたたく星を見上げた……。

つづく。

太鼓たたいて十三年

「えー、大旦那さまのお召しにあずかり参上つかまつりました、お座敷をつとめさせていただきます、平助でございます」

うやうやしく挨拶してから顔を上げ、そして彼は心のなかで、あつと叫んだ。てつきり賑やかだと思っていた座敷のうちには、上席に慚然とした表情の成田屋七兵衛がひとり、その横には、これも多少顔を引きつらせた感じの静波が、緊張した面持ちで控えているだけだった。目を凝らして部屋のなかを見渡してみても、この二人きりより他にだれもない。賑やかに笛を吹き、三味を鳴らす芸者衆のすがたは、どこを探しても見当たらなかった。

座の空気は、あきらかにしらけきっていた。平助は、これはいけないと思いつぐに立ち上がると、たすきをかけ、着物の尻をはしょって帯にねじりこみ、手ぬぐいで鉢巻をしめた。

「では、さっそくご無礼をばつかまつりまして、あら面白い、神踊りつと、はい、やーとこせ、やれ、住吉さまの、きしの姫まつめでたさよ、それっ」

節をつけて歌の文句を諳んじると、そのまま、ついつ、ついつと、外股の足さばきで踊りだした。すぐにその動きにあわせて、静波のひく三味線がゆっくりとかぶさってくる。

てん、てと、ててん、てん。

かっぱれ かっぱれ よーいとな よいよい

猪牙でゆくのは深川がよい わたる棧橋の あれわいさのさい
そいそと

客のころは うわのそら

飛んでゆきたい あれわいさのさ めしのそば……

かっぱれは、もとは住吉大社のお田植え神事に奉納される住吉踊

りが原型だといわれている。それが願人坊主などの手により大道芸として広められ、やがて宴会芸に取り入れられた。江戸は吉原で活躍する帮間たちにとつて、これはまさにお家芸と言つてよい。こつけない振り付けの男踊りではあるが、一流の演者たちの手にかかる、なんともいえない艶つぽさが伝わってくる。はじめ、腕を組んで無然とした面持ちでながめていた成田屋も、しだいに表情をゆるめ、しまいには手を打って囃子を入れはじめた。

「あーこりゃこりゃ、っと、あつはつは」

ありやせ　こりやせ　やつとこせ　よいやな

坊さま二人で芳町がよい　あがるお茶屋は　あれわいさのさい
そいそと

となり座敷を　ながむれば

さしつ押さえつ　あれわいさのさ　キツネけん……

「平助とかいったね、ささ、まずはこつちへきて一献やりな」

踊り終わつて、額にうつすら汗をにじませながらかきこまる平助を、成田屋が手招いた。すっかり気をよくしたようで、片口の銚子をぐいっと突き出してくる。差された盃をうやうやしく受けて、平助はそれをぐいっと干した。

「へへっ、こりゃどうも、ようやく生返りやした、ありがとうぞんじます」

「わたしは、こういうところへ一人で来るのは初めてでね、不案内だから、なにか作法にかなわぬことがあるかもしれないが、そのときは遠慮なく言っておくれ」

たばこ盆を手元へ引き寄せながら、成田屋が言った。平助は、背を丸めてちょこなんと座つたまま、顔の前で大げさに手を振つてみせた。

「いえいえ、吉原遊びが格式ばっていたのは、もう、うん十年も昔の話でございますよ。わずらわしい作法が嫌われて、深川や新宿あ

たりの岡場所にすっかりお株をうばわれてからは、ここ吉原もだいぶ遊びやすくなりました」

「そうかい。いつもは付き合い酒に顔を出す程度で、それもたけなわになる前にそそくさと退散するものだから、遊びかたなどよく分からない。今だって、あんたがこうして来てくれなかったら、わたしは静波と二人、ずっとここでお見合いをしていたことだろうよ」

「ははは、と乾いた笑い声を立て、成田屋はゆっくりと煙管をくわえた。

「なんのまあ、それでいしたら、ぬしさん、今日はどういう風の吹き回しでおいでなんしか？」

静波が、盃に酒をそそぎながら小首をかしげる。鬚のうえで玉かんざしが踊り、しゃなりと鳴った。成田屋は、干した盃を静波に返すと、今度はそれに酒をそそぎながら曖昧な返事をした。

「まあ……、この歳になるといろいろとあつてね」

そんな二人のようすを、平助は愛想笑いをうかべながらも素早く観察した。たしかに自分がここへ来たとき、二人は緊張して顔をこわばらせていたが、しかし殺気だつてぎすぎすしたという感じではなかった。今だって静波は、素知らぬ顔で盃を受けている。親の敵と酒を酌み交わす、そんな殺伐とした雰囲気はここにはなかった。

お里の考えすぎか……。

しかしその後に見えた成田屋の言葉は、平助を青くさせた。

「静波……、両親や兄弟のことは覚えているかい？」

「へえ？」

「お前の家族のことだよ。達者で暮らしているのかい？」

さあつと彼女の顔色が変わるのを、平助はたしかに見た。市松人形のように白粉を塗りたくった遊女の顔は、素人目にはその表情の変化をとらえにくい。しかし長年吉原で客と遊女のあいだを取り持ってきた平助になら、彼女たちの心のうちにある、喜びや、悲しみや、怒りや、驚きが、そのわずかな顔色の変化でもって手に取るように分かった。

やはり静波は知っていたのか。

成田屋が彼女の父の店を潰すきっかけをつくった男で、ひいては自分が吉原へ身売りするはめになった、その原因をつくった張本人だということを。

なにか言葉を取り繕って話の流れを変えなければと思案しているところへ、氣をとり直した静波が、ぽんとやり返した。

「ここは廓のなかでありんす、浮き世のそとの話は、大門の向こうでやっておくんなし」

「これはすまなかった、少し酒に酔ってしまったようだ。若いころから働きづめに働いていたせいで、こういうところへ来るとつい身についた野暮な性分が出てしまう。ゆるしておくれ」

成田屋がそう穏やかに詫びると、静波はふだんと変わらぬ顔にもどり、軽くしなをつくって言った。

「もう、お休みなんせ。あちらに床のご用意も出来ておりいす」

見ると、奥の間の、わずかに開いた襖の向こうに床が敷き延べられていた。枕元に置かれた香炉から、紫色の煙が天井へ向かって糸のように立ち上っている。

平助は、なぜだか軽い吐き気をおぼえた。

成田屋は今夜、静波を抱くのか……、自分が苦界へとおとしめたその少女を、抱くのだろうか……、勝ち誇って、汚して、それで満足して眠るのだろうか……。

心の奥底の、ふだんはフタをして気づかないふりをしている、その暗闇の部分から、ひしひしとやりきれない思いが、焼けつくような怒りがこみ上げてくるのを感じた。

人の世は、なんて無情なんだ。

「これ、太鼓持ち。なにか賑やかな唄でもうたっておくれ」

そのとき、不意に成田屋から声をかけられ、反射的に笑顔で返した。

「へい」

こんなときでも、ふだんと変わらぬ愛想笑いが出てしまう。我な

がら、身についた性分を悲しいと思った。

しかし自分の仕事は、笑うことであり、ひとを笑わせることであり、平助は信じている。怒りも、憎しみも、悲しみも、それを笑って、笑って、笑い飛ばしてしまうことが出来れば、人はその身に背負わされた苦しみを、いくらかでも和らげることが出来る……。平助は、いつもそう自分に言い聞かせ、了見できない苦い思いを心のうちに押しとどめてきたのだった。

商売道具の団扇太鼓を勢いよく、ででん、と打ち鳴らす。

「それでは、お粗末ながら、一曲ご献上つかまつります」

太鼓で調子を取りながら、節をつけて歌いだす。その唄に、静波の弾く三味線が絶妙な間合いで重なってきた……。

ひとつとさ　ひとりのお客はあてにせぬ　あてにせぬ　親切ぶり
して金をとる　金をとる

ふたつとさ　深い恋路とみせかけて　みせかけて　涙を見せれば
嬉しがる　嬉しがる

みつとさ　水も漏らさぬ仲とみせ　仲とみせ　睦言かたれば飛
び上がる　飛び上がる

よつとさ　欲に目のない我がつとめ　我がつとめ　金をとらね
ば　身が立たぬ　身が立たぬ

いつとさ　いつも手管の空なみだ　空なみだ　流してみせれば
金になる　金になる

「あつはつは、こりゃあいい、こりゃあ愉快的な唄だ、あははは」
なかば当てつけのようにつたつたその唄を成田屋はいたく気に入ったようで、終始愉快そうに手を打ってはやし立て、笑い声を上げていた。静波も三味をつま弾きながら、ときどきこみ上げてくる笑いをくすつと噛み殺している。

廓のなかに拘束され、過酷な生活を強いられている遊女たちの、そんな悲しみを笑い飛ばすかのようなこの手鞠唄を、平助はとても

気に入っていた。愉快な唄だと思った。しかし気に入っているからといって、お座敷で堂々とうたえる歌詞ではない。じつは平助がこの唄をお客の前で披露するのは、今日が初めてだった。

「いやありがとう、今のお前の唄をきいて、わたしのなかで、なにかが吹っ切れたような気がするよ。平助さんといったね。今後うちの店へ出入りを許すから、たまに遊びにおいで」

「へい、ありがとうございます」

平助にいくばくかのご祝儀を渡してから、成田屋は、やあら静波のほうへ向き直り居ずまいを正した。そして一体なにごとかと目をみはる彼女に向かって、開口一番こんなことを言った。

「静波、……いや、ここはあえて、お佳代と呼ばせてもらいますよ」
今度ははつきりと、静波の顔から血の気が引いてゆくのが分かった。彼女はびくつと身をこわばらせると、そのまま視線をふらふらと泳がせた。

「お前は、もうすでに承知していると思うが、今からおよそ七年前、お前の父親と商売で争って、結果お前たちの店を潰してしまったのは、他でもない、このわたしだ」

平助は、もう一度心のなかで、あつと叫んだ。やはり成田屋さんも……。

「わっちは……」

「たのむから今だけは、今だけでいいから、下野屋のお佳代でいてくれないか」

「あ、あたしは」

静波は、廓言葉をあらため、かつて大店の娘だったころの言葉づかいになって呻いた。

「あたしは、なにもそんなこと……」

「隠さなくてもいい、お前がどんなにわたしのことを恨んでいるかわたしを呪いながら苦界に身を沈めてきたか、今日までそのことを思わない日はなかった」

静波は、膝の上にそろえた拳をぎゅっと握りしめた。そして固く

引き結んでいた口もとからやがて苦しげな嗚咽をもらすと、まるで生まれたての赤ん坊のように、その顔をくしゃつと崩した。

「ああそうです、呪いました、呪いましたとも……。ある日突然、店は藩から御用差し止めとなり、それまで懇意にしてくださった商い先からも手を引かれ、こちらで注文を取りに行ってもだれからも相手にされず、使用人は一人二人と店を去り、父は妾をつれて出奔、母は病に倒れて亡くなり、幼い二人の弟はどこへ奉公に出されたのやら行く方知れず、そしてあたしは……。木枯らしの吹きすさぶなか女衞に手を引かれて」

声を詰まらせながらそこまで言うと、急に彼女は顔を上げ、成田屋の目をきつと睨みすえた。

「けれど、それがなんだって言うんです？　今さらそんなこと言つて、わざわざあたしのお座敷にまで言いに来て、それでどうなるっていうんです？　成田屋さんはそれで少しは気が晴れるかもしれないが、ただどあたしは……」

「まあ、ちよつと待ちなさい」

静波の鋭い視線にひるむことなく、成田屋が言った。

「わたしはね、下野屋さんと商売で争ったことじたいは今でも後悔していないよ。わたしも、そしてお前の親父さんだって、命がけで御上のご用をつとめてきた。どっちが勝つかなんて、そんなものはその時の運だし、ことによつちゃあわたしの店のほうがなくなっていくかもしれない。だから……。そのこと自体には後悔していないんだ」

終いのほうは、なかば自分に言い聞かせるようにつぶやいた。静波のほうも、だいぶ心が落ち着いてきたらしく、だまって自分の膝の先を見つめている。成田屋は、ひとつ咳払いしてから話をつづけた。

「下野屋さんが暖簾を下ろすと聞いたとき、わたしはね、あんたの親父さんに援助を申し出たんだ。嘘じゃない。同じ商売をする仲間として下野屋さんにはまだまだ頑張つてほしかったし、わたしには

助けてやれるだけの余裕もあった。しかし……」

「う、嘘よ……、お父つあんはずっと成田屋さん、あなたのことを人の心を持たない冷血漢だと言つて恨んでいたわ。傾きかけたお店に、追い打ちをかけるような人だつて……」

「いや違つ、そうではない」

「そうよ」

「では言おう」

成田屋は、ゆっくりと腕を組んで目を閉じた。そして、一度なにごとかを言いかけて思いとどまり、しかしついにはため息とともに言葉を吐き出した。

「下野屋が潰れた本当の理由は、御用をしくじつて商いが細つたからじゃない。そのことによって、用人と結託して藩の公金を横領していたことが発覚したからなんだ」

「嘘よっ！」

「これは嘘ではないのだよ。また、お前の父親は妾をつれて出奔なとしておらん。牢につながれ、獄死したのだ」

「なんてこと言うの。あんたの言うことなんか信じるもんですか！ええ、ええ、けつして信じるもんですか！」

「下野屋にいた三人の番頭を糾してみれば分かることだ。みな口をそろえて同じことを言うだろう」

静波は、いやいやをするように首を振った。

「嘘よ……、嘘だわ……、だいいち番頭の弥一朗も、清次も、仁輔も、今じゃどこでどう暮らしているのかさえ分からないのに……」

成田屋が、閉じていた目をゆっくりとあけた。

「三人とも、うちの店で働いてもらっている」

「……え？」

「下野屋が取り潰しにあつたとき、わたしはそこで働いていた者ができるだけ多く抱えることにした。親切心や、まして慈悲の心からではないよ、これもひとつの縁に違いないと思つたからだ。優秀な人材を野に埋もれさせておくのはあまりにも惜しい。わたしの店へ

きて存分に働いてもらえば、それは取りも直さずお互いのためになることだ」

驚いて何も言えない静波に向かって、成田屋はさらに驚くべきことを言った。

「それとお前の二人の弟な、新太郎と亀吉だが、奉公に出されたのではなく、上方にいるわたしの弟の養子となっている。ちょうど弟夫婦には子がなかったので、将来は兄弟二人で力をあわせ店を継いでもらうと喜んでいたし、二人とも腕白ざかりだが元気にやっているよ」

静波は、がんと頭をなぐられたような気がした。なにも言えず、なにも考えられず、ただ金魚のように口をぱくぱくさせている。そんな彼女に向かって、成田屋は慈愛に満ちた笑顔を向け、優しく諭すように言った。

「……だから、あとはお前さんだけなんだ。お前だけが、老いたわたしにとって、たった一つの気がかりだったのだよ。もう何年ものあいだ八方手を尽くして探させていたんだが、お前の消息だけが、ようとして知れなかった。だが昨年夏、商いの仲間に連れられてこの楼へ上がったとき、偶然お里さんからお前の身の上をきかされて、もしかと思ったんだ。人をやって調べさせてみたらやはりそうだったよ。静波は、わたしがずっと探しつづけていた、お佳代だったんだ」

成田屋は、ここではじめて涙を見せた。そして膝をすって静波のそばまでにじりよると、放心している彼女の手を取って、その顔を覗き込んだ。

「どうだろう、わたしの養女として家に来てはもらえまいか？ もちろん家族はみな歓迎している。どういうわけか、うちには男ばかりが生まれてね、妻は以前から娘がほしかったとぼやいているし、お前が来てくれれば、わたしもこんな嬉しいことはない」

それまで啞然とこのなりゆき見守っていた平助が、ここで初めて口を開いた。

「静波さん、あ、いや、今はお佳代さんだったね。良かったじゃないか。はは、嬉しいね。世の中にあ、こんなに素敵めつばうな事件がおきることもあるんだね。あつしは……、なんか感動しちまって、もう……」

「これこれ、太鼓持ちが泣いてどうする」

「ははは、違えねえ。太鼓持ちが泣いてちゃあ、おまんまの食い上げだ」

二人がしんみり笑い声を立てたところで、静波がようやく言葉を発した。しかし驚いたことに、なぜだか彼女は、すっかりもとの静波に戻っていた。

「ぬしさんの夢語り、楽しんで聞かせてもらいなんした、うふふ、面白かったわいな」

「これ、お佳代。わたしは……」

「ここは廓のうち、野暮は言いつこなしでありんす」

信じられないといったふうに見つめてくる成田屋に向かって、静波はしゃんと背筋をのばし、力強い眼差しで言った。

「わっちにも、意地というものがおざりんす。ぬしさまの申し出は涙が出るほど嬉しおざんすが、どうぞそのお話、これまでにしてくりゃんせ」

しばらくのあいだ静波を厳しい表情で見つめていた成田屋は、やがてふっと力が抜けたように優しい顔になって、何度もうなずいてみせた。

「分かったよ、お佳代、いや、静波……。あたしもいささかの矜持を持って生きてきた人間だ、お前さんの気持ちは痛いほどよくわかる。でもね、これだけは覚えておいておくれ。お前さんにはちゃんと帰る家がある。ちゃんとあるんだよ。もし辛くなったらいつでも訪ねておいで。わたしも、わたしの家族も、いつまでも待っているから、きつと待っているから……」

そう言っしてわだらけの顔に涙を浮かべる成田屋に向かって、静波は最後に両手をあわせ、拝むようなかっこうで言った。

「弟たちのこと、どうぞよろしく頼みます……」

「ああ……」

太鼓が、ででん、と鳴った。平助が帯を解き、着物から腕を抜いて上半身をはだけさせた。その見事な太鼓腹には、墨でこれまた見事なお多福面が描かれていた。平助は泣いていた。男泣きに泣いていた。しかし腹のお多福は、ゆさゆさと波打つように笑っていた。これぞまさしく、泣き笑い。

「それでは失礼いたしましたで、へへっ、ここらであっしの十八番、へソ踊りをごらんに入れまするーっ」
ででん、でん！

えー 奴さん どちらへ行く

あーこりゃこりゃ

だんなをお迎えに

さても寒いのに共ぞろい

雪のふる日も

風の夜も

さてもお供はつらいね

いつも奴さんは高はしより

ありやせ こりゃせ

完

太鼓たたいて十三年（後書き）

お読みくださり、ありがとうございました。ちょっと、ちから技を使っ
てしまいました。が、久しぶりに楽しく書かせていただきました。
なお職業小説企画を運営してくださった沢木香穂里さま、企画に作
品をよせてくださった参加者さま、本当にご苦労様でした。そして
サイトまで読みに来てくださった読者さま、本当にありがとうございました。
ふたたび皆さまと、どこかの企画でお会いできましたなら、
そのときはどうぞよろしくお願いいたします。でわでわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2763m/>

笑い三年、泣き八年、太鼓たたいて十三年

2010年10月8日14時30分発行